ピンクリボンNEWS japan

2013年 秋号 Vol.2 No3

発行人　特定非営利活動法人 J.POSH　　編　集　ピンクリボンNEWSjapan 編集委員会
発行所　J.POSH事務局〒538-0043 大阪市鶴見区今津南2丁目6番3号　TEL.06-6962-5071

J.POSH 日本乳がんピンクリボン運動®

TOPICS

おめでとう東京オリンピック、おめでとう乳房オンコプラスティ(乳房再建)、

～ 幾多の困難を乗り越えて ～

今日、めでたく2020年の夏季オリンピック・パラリンピックの東京開催が決定した。本当にうれしいことだ。1964年の東京オリンピック当時、私自身はまだ小学校4年生で、アジアはじめてのオリンピック開催ということで、当時は日本中が興奮のるつぼの中にあった。2020年にあの興奮をまた経験することができるのかと思うと今から気持ちが落ち着かない。

しかし、今回の開催招致までの道のりはそう容易なものではなく、その裏には幾多の試練があった。過去の落選。東北大震災による原発事故と放射能汚染についての日本への誹謗中傷と風評被害。その困難を乗り越えて、この度オリンピック招致に至ったことは実にうれしいことである。

そんなこんなで、1964年からほぼ半世紀を経て日本の東京オリンピック開催が叶ったが、乳がんの世界でもほぼ半世紀の時を経て現実に夢が叶ったことが私自身の中にはあった。それは、今年2013年6月12日に乳がん全摘手術後の乳房再建に使用する人工乳房の保険適応が承認されたことである。今回承認されたのは人工乳房を体内に入れる際に皮膚を伸ばすための皮膚組織の拡張器(ティッシュー エキスパンダー)と人工乳房である。未だに、種類は限られたものしかなく充分とは言えないが、現在種類も形状や材質が自然に近いものを承認申請中である。

もともと保険適応がここまで遅れたのには理由があった。それは人工乳房の安全性である。これを使った乳房形成は奇しくも東京オリンピックが初めて開催された1960年代に飛躍的に進歩した。人工乳房の製造は、1963年に米国ダウコーニング社がシリコン製バッグにシリコンジェルを詰めた乳房インプラントを開発。1965年フランスで生食水入りバッグが誕生。人工乳房の船出もこのまま順風満帆に行くかと思いきや大きな問題が前に立ちはだかったのであった。それは1990年代にダウコーニング社のシリコン製バッグの破損と内容物の漏出による炎症の発生、はたまた最悪は膠原病が発病したとのことで訴訟が続出したのであった。その後の検証によりシリコンゲルと膠原病の関連は科学的には認められなかった。1990年以降の人工乳房とそれに関連した米国での事項を年代別で述べると、1992年　シリコンジェルバッグ使用禁止、1994年集団訴訟和解（$4,250million）、1995年ダウコーニング社破産、1996年学会は豊胸材を市場に戻すように助言、2000年生食バッグ承認、コヒーシブシリコン開発、2006年シリコンバッグ使用許可、といったところである。最近では2011年12月にはフランスのポリ・アンプラン・プロテーゼ（PIP社）の豊胸材の問題（破損の恐れと医療用より安価なマットレス用のシリコン材の使用の発覚し発癌の恐れあり）が浮上し、人工乳房の安全性についての問題が再度浮上している。日本はというと残念なことに厚労省は本年まで乳房インプラントの薬事承認はしておらず、安全性に関して保障して来なかった。このように人工乳房は歴史的に多くの難問を抱えてきたが現在では改良が重ねられより安全で充実した内容のものが使用可能となっている。

私個人としては、1980年代はじめに研修医時代を過ごしたころには人工乳房は医療の中でもっと手近なものであった記憶があるが、1980年後半から1990年にかけてピタッとその姿を消してしまった。しかし、欧米ではその後1990年代後半、特に2000年以降からは人工乳房を用いた乳房形成はずいぶん進んだ。これに比べて日本はこの分野で大きく遅れをとってしまったというのが実感だ。それだけに今年保険適応を受けたことで日本の遅れを取り戻す大きな一歩となることを期待したい。

東京オリンピックも人工乳房も1960年代から50年以上も歳月を経て再び日本の国民の未来を明るくしてくれると確信している。おめでとう、そしてこれからもがんばろう!!

For the future generation!!

目　次

TOPICS
「おめでとう東京オリンピック、おめでとう乳房オンコプラスティ」　1
乳がんTure-Zure「乳がん看護認定看護師になって思うこと」　2
KIX国際ドラゴンボート大会参加 …… 2
「10月20日は乳がん検査をうけられる日曜日」JMS2013　3
「奨学金まなび」ご寄付を頂いた方のご紹介 …… 4

乳がんTure-Zure　リレーコラム 第5回

乳がん看護認定看護師になって思うこと

乳がん看護認定看護師　軽部　真粧美

乳がん看護認定看護師の養成は2005年に始まり、2013年7月現在、213名の乳がん看護認定看護師が全国で活躍しています。しかしながら、まだまだ必要としている数には及ばず、乳がん看護認定看護師がひとりもいない県もあるのが現状です。医療は日進月歩で発展し、治療選択肢が多くかつ複雑になってきているため、患者さん達はどの治療が自分に適切なのか迷い悩みながら診療を受けています。また、不安なときやつらいときに医療関係者のサポートが必要な場合もあると思います。増え続ける乳がん患者さんが、どこの施設に通院しても最も良い治療と看護が受けられるために、乳がん看護認定看護師は誕生しました。

乳がん看護認定看護師には、以下の能力（日本看護協会HPより抜粋）が期待されています。

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

①乳がんの集学的治療および治療に伴う副作用に対する専門的ケアを計画実施できる。また、治療継続に必要なセルフケア確立に向けた指導ができる。
②リンパ浮腫の予防、症状緩和に向けての専門的技術を提供できる。
③乳がん患者の治療に伴うボディイメージの変容、心理・社会的な問題に対する相談・支援ができる。
④乳がんの治療に関する最新の知識を持ち、患者の意思決定上の情報提供ができる。
⑤再発の早期発見のために乳がん自己検診法を指導できる。
⑥乳がん患者・家族の看護について、相談・指導と乳がんの治療・ケアに携わる専門家（医師、専門看護師・認定看護師）と連携し、他の看護職者に対する効果的な支援ができる。
⑦乳がん患者・家族の人権を擁護するために適切な倫理的判断を行うことができる。

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

乳がん看護認定看護師達は、その役割を遂行するだけでなく、全国の看護師を対象として乳がん看護の勉強会を企画・実施し、乳がん看護の知識や技術の普及を図り、患者会のサポートや乳がん検診啓発活動をしていますが、皆様が通院する施設では、必要な支援を受けられているでしょうか。また、もっと充実させて欲しいのはどのような支援でしょうか。

私は、2008年に乳がん看護認定看護師の資格を取得し、今年でちょうど5年目となります。現在は、乳腺科外来の専属看護師として、ほとんど毎日、乳がん患者さんの看護に携わらせていただいています。そのため、診察に同席できる機会が増え、患者さんが乳がんと診断されたときから継続的に関われるようになりました。数多くの乳がん患者さんと出会い、患者さんや家族の方々からたくさんのことを学び、一緒に悩み、泣き、喜びを分かち合うという、人生における貴重な時間も共有させていただきました。乳がん患者さんの役に立てたと思えたとき、患者さんから感謝のことばを頂いたとき、乳がん看護認定看護師になって本当に良かったと実感します。しかし、このような体制がとれている施設は全国でも少数です。もちろん、認定看護師自身がその役割を十分に発揮できるように、組織（病院）に自ら働きかけることも重要な役割だと思いますが、乳がんが女性のがん罹患率1位であり、外来での治療を主としているにも関わらず、乳腺科専属となりフリーで活動できる看護師を認めてくれる施設が少ないのは社会的問題です。

女性なら誰もが乳がんに罹患する可能性のある時代になりました。インターネットなど様々なメディアからの乳がんの情報量も、5年前とは比べものにならないくらい増えました。看護師は、ひとりひとりの患者さんや家族が必要としている情報を適切に提供し、不安なときにはいつでも傍にいて相談に乗れる存在であり続けることが大切だと思います。また、乳がん患者さんが安心して治療を受けられるように、治療の選択や継続に迷ったときには、一緒に考え、患者さん自身が納得して意思決定ができるように支援することも重要です。将来一人でも多くの看護師が、一人でも多くの乳がん患者さん・ご家族の役に立ち、どんな場所や施設で療養していても、その患者さんが必要とする看護が受けられるようにしていきたいと思います。一歩一歩、一緒に歩いていきましょう。

こんなピンクリボン活動をしています

KIX国際ドラゴンボート大会参加

8月25日(日)関西国際空港の「そらパーク」で開かれた第10回KIX国際ドラゴンボート大会。NPO法人J.POSHと三年前から交流のあるシンガポールのPINK SPARTANSの呼びかけで、合同チーム(シンガポール選手11名、日本から9名)ができ、大会に出場することになりました。PINK SPARTANSは、乳がんサバイバー(経験者)とその家族等でできたピンクリボンチームです。

乳がんサバイバーのドラゴンボート参加は、カナダのドクターDon MacKenzie氏の、乳がんサバイバーにも浮腫などを防ぐ適度な運動になり、仲間とともに楽しめるとの提唱で広まったもので、世界各地には沢山のピンクリボンチームがあり、多くのサバイバーがドラゴンボートを楽しんでいます。世界的には、ピンクリボンカテゴリーのレースのある大会もいくつかあり、乳がんと闘っている人たちをたたえ、亡くなった方々に想いを寄せるFlower Ceremonyも行われることがあります。今回、ピンクリボンカテゴリーはありませんが、ピンクリボンチームが日本の大会に出場するのは初めてと言うことで「乳がん克服水上で輝け」(読売新聞)「がん克服の意気合わせ力漕」(産経新聞)と、新聞でも紹介されました。

雨の中、ドラゴンボートレースに挑む合同チーム

「大会ウラ話」

大会当日、朝から雨。控えのテント内はグショグショ。そんな中だからこそでしょうか、なんとなく団結感。チームPINK SPARTANSの日本人は、ちょっとだけ練習した者6人と、まったく今日が初めてという3人。なので、最下位は覚悟していたものの、予選で5チーム中4位。チャンスはあと3回。次はもっと頑張るゾと意気込んでいたところ、残念ながら、悪天候のため大会は中止となってしまいました。

ドラゴンボートの楽しさを少し味わい、次はもっと頑張るとの気持ちを中断された思いの面々。「今度はシンガポールに来て」とのPINK SPARTANSのお誘いに、その気になってる感じです。

ドラゴンボートに興味を持たれた方、国際交流に関心のある方、ご一緒に楽しみませんか。きっと新しい世界が広がります。

J.POSH理事　平田以津子記

10月20日(日)は乳がん検査を受けられる日曜日(JMSプログラム)

NPO法人J. POSH(日本乳がんピンクリボン運動)では、2009年より「ジャパン・マンモグラフィー・サンデー(JMSプログラム)」を実施しております。これは、平日多忙に過ごす現代女性が、休日に乳がん検査を受けられる機会を作るという目的のものです。乳がん月間である「10月の第3日曜日」に全国の検査施設に呼びかけまして実施しております。本年も昨年を上回るペースで検査施設に応募いただいております。

乳がんは、日本女性の13～14人に1人が罹患する女性の悪性腫瘍のトップです。約10年前は、30人に1人が罹患していました。その後の約10年間でこれだけの割合で罹患者が増加しております。また、乳がんで亡くなる方も欧米では1990年代から減少してきていますが、日本ではようやく2012年に減少したとの数値がつい最近発表されました。乳がんは、早期発見すれば治癒する確率の高い癌です。今年も多くの方々に「ジャパン・マンモグラフィー・サンデー(JMSプログラム)」を受診していただけることを願っております。

全国の検査施設の詳細情報は、JMS2013特設ホームページに掲載しております。

URL http://jms-pinkribbon.com

奨 学金まなび ご寄付を頂いた方のご紹介

中村学園女子高等学校
インターアクト部の皆様

中村学園女子高等学校（福岡市城南区）インターアクト部の皆様から「奨学金まなび」に寄付をいただきましたので、ご紹介いたします。

お寄せいただいたご厚意は、乳がんでお母さんを亡くした、あるいは乳がんで闘病中のお母さんまたは保護者をもつ子供たちの「学びたい」の気持ちを大切に守っていくために役立てていきます。

部の紹介

主な活動としては、毎週金曜日の例会や海外支援物資収集です。集めた切手や書き損じはがきはタイの子どもたちの学費にかわり、ペットボトルのキャップは発展途上国へ贈られる予防接種ワクチンにかわります。また、週末には城南区の乳児院で子どもたちのお世話をしたり、夏休みには24時間テレビ募金活動への参加や、地域のお祭りやバザーの手伝いに参加したりと様々なボランティア活動を展開しています。

中村学園女子高等学校インターアクト部の皆様への質問とご回答を掲載させて頂きます。

Q 奨学金まなびをどこでお知りになられましたか

A インターネットで知りました。

Q 寄付先として、奨学金まなびを選ばれた理由をお教え下さい

A 3年生の先輩が引退で最後に一緒に活動したいと思い色々調べた中でピンクリボン募金とゴールドリボン募金をしました。今私たちは、充実した学校生活を送ることができています。どんな環境で育った高校生も同じ分だけ充実した学校生活を送る権利があると思うので、同じ高校生として役に立てたらなと思い選びました。

Q 今回の寄付にあたってどのような活動をされましたか

A 画用紙に奨学金まなびについての説明を書いたのを持ちながら大きな声で街頭募金をしました。

Q 活動の中で何か印象にのこっていることはありますか?

A 最初は私たちもピンクリボン募金についても何もしりませんでしたが、街頭募金をしていて、「ピンクリボンって何ですか?」「奨学金まなびって何ですか?」と聞かれることが多く知られていないことを改めて感じました。 また機会があれば頑張ろうと思います。

奨学金まなびについて

将来ある子供たちが家庭の経済的な理由、特に乳がんによって引き起こされた理由で学業を諦めるようなことが起こって欲しくないとの思いから、全国初の高校生を対象とした奨学金「J.POSH 奨学金 まなび」（無返済）の支給を2009年より行っております。

今後ともこの奨学金を継続させる為により多くの方々からのご支援をお願い致します。

PRNj 秋号あとがき

9 月から、NPO 法人 J.POSH の事務局長に重松隆史が就任しました。前任の成田同様、ピンクリボン運動を推進していく所存ですので、皆様のご支援、ご指導の程よろしくお願い致します。

ピンクリボンNEWS japan 編集委員（五十音順・敬称略）

奥野 敏隆（神戸アーバン乳腺クリニック、西神戸医療センター 乳腺外科）
軽部 真粧美（自治医科大学附属病院 看護部）
重岡 靖（淀川キリスト教病院 腫瘍内科）
田中 完児（J.POSH理事長 乳腺外科）
蒔田 益次郎（癌研有明病院 乳腺外科）
吉野 裕司（石川県立中央病院 乳腺外科）